

Gundam Build Divers
GAWC
GIMM & BALL'S World Challenge

ガンダムビルドダイバーズ
ジムとボールの世界に挑戦!

Episode
8



GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

ジム&ボール **ついに** 最終決戦!?
黄金のポリキャップが7つ揃うそのとき、
奇跡が起きる



ボールはわくわくと問うた。

「そうね——」ノズは、顎にちゃんと人差し指をあてて思案すると、「たとえばわたしとマーキーがブチ・ルー卒業して、念願だったバンドデビューさせてもらえる、みたいな？ ま、これってわたしがゴールデン・ポリキャップの情報と引き替えにもらえる報酬のハズだったんだけど」

見れば、ボールの表情が一転、絶望の淵に暗く落ち込んでいる。

「大丈夫だから！ 辞めないって決めたからブチ・ルー！」

マーキーもブンブンと首を縦に振る。

「それってつまり、ゴールデン・ポリキャップが7つ全部集まったら、好きな望みがかなうって事か？」

ジムはノズに向かって興味津々と身を乗りだした。

「もちろんそうだって決まっちゃったわけじゃないけど……どうせ期待すんなそれくらいの夢、抱きなさいよってハナン」

「夢ねえ」

「だったら、僕はもう叶ったかな！」

なにやら頬を染めるボールを、皆が「」と見る。

「だって、こうしてブチ・ルーの二人とプライベートで喋ってる、なんてさ！」

「はいはいはい……」

もはや呆れを通り越し同情を声にするジムの一方で、ノズは、くすぐったそうに困り顔を緩めた、そして、

「……………」ありがと」

手もとのグラスに視線を落とし、そっとこぼした声は、まるで初めて出会った時の、お淑やかだった彼女を想わせ——目を丸くして見つめるボールとジムの視線から逃げるように、ノズは慌てて隣のマーキーの方を向いて、

「マ、マーキーは!? 望みがかなうとしたら何をお願いしたい!?」

「……………」温泉旅行……………」

*

その翌日、ラグランジュポイント2『アー・バオア・クー』ディメンションに、ノズのキュベレイダムドとマーキーの百式壊（クラッシュ）の姿があった。

「……………」でも驚いた……………」

クラッシュのコクピットでマーキーは、交信ウィンドウの中から「？」と自分を見るノズに微笑みを向けた。

「……………」ノズの方から二人に、フォースバトルやらないかなって、申し出る

なんて……………」

「自分自身驚いてる」

ノズもダムドのコクピットで、交信ウィンドウのマーキーに微笑みを返す。

「なんか自然と口から出た。あの二人見てたら……自分って今まで、なんでもかんでも、あれこれ難しく考えすぎてたのかもしれないあって。意味もなく思い悩んでる自分がなんだか馬鹿らしく思えてきてさ……好きなこと、好きなように、やりたいこと、やりたいようにすれば、いいのかも……………」

浮かべた笑みを囁みしめる。

「……………」おんなじだ……………」

ノズの表情が「え？」と問う。

「……………」あたしもあの時、自然と言ってた……温泉旅行って……………」

一瞬驚いたのち、ノズは、思わずクスクスと、

「いいんじゃない？ 温泉行って羽伸ばすの、わたしも思いっきし大賛成だし、ボールだってわたしらと温泉なんてまさに夢だーとか、びっくりするくらい盛り上がったし」

「……………」ジムだけはブツクサ文句言ってたけど……………」

マーキーも笑い出す。二人は交信ウィンドウ越しに顔を見合わせると、嬉しそうに大きな笑いを重ねた——その時だった、突然、キュベレイダムドと百式クラッシュを、闇の光とも思える漆黒が包み込んだ。

ハッと息を飲んだノズとマーキーに、聞き覚えのある声が届く。

「我々との契約はどうした？」

ノズは、姿の見えない相手を、それでも強く見据えると、

「わたしたちは降りる」

きっぱりと言った。

「わたしとマーキーは、これからもブチ・ルーで歌い続ける。わたしたちを待っていてくれるファンのために、笑顔を届け続ける」

マーキーも、ノズと心をひとつに漆黒を睨みつける。

「……………」バンドデビューの必要はない、だから、あたしたちにはもう、構わないで欲しい……………」

「翻意することはないか？」

「……………」この気持ちは、絶対に変わらない……………」

一瞬の沈黙ののち、

「そうか……………」とても残念だ」

次第に辺りの漆黒が失せ、満天の星のまたたきが戻り——キュベレイダムド

ポリポッドボール

多脚型の移動砲台として、ストームプリンガーのサポートを担ってきたボールの愛機。バトルによって中破し、一時は応援に徹したときもあったが、現在では「G.H.L-M.A.D GUN」を携えたことでサポート以上の役割を果たせるようになった。



ガンダムストームプリンガー

ジムが製作したガンダムタイプ。当初から汎用性に優れた全領域型の機体であったが、「G.H.L-M.A.D GUN」の装備によって、よりその戦闘の幅が広がった。デカブツとの戦いが多い中で、機動性を残しつつ攻撃力を増強していく方向性を選んだことが正解だったようだ。



機体紹介
1

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

Episode

8

ジムとボールには指一本
触れさせない……もしそのクソきたねえ
手で汚したら……ぶっ潰す!

Episode

8

ゴールデン・ポリキャップが7つ
全部集まったら、
好きな望みがかなうって事か?

戦闘艦艇の残骸だけ、ノズとマーキーのガンブラの姿はない。
「マーキーちゃんの百式は、もしかしたらどこかに隠れてG・H・L・スナイパーライフル構えてるのかもしれないけど、ノズちゃんのキュベレイまでいないってのは……」

「やっぱ、帰っちゃったんじゃないかね？」

「ええええーっ！」

ボールの悲壮な叫びに交信が思いきりハウリングした——その時、
「ジム……ボール……」

「ノズちゃん！」

届いた声に、ボールはホッと安堵をもらすと、

「待たせちゃってごめん！ 今日みたいな大事な日のためにって大切にしまっ
ておいた勝負シャツをさ、いつの間にか母親が、妹たちが学校で使う雑巾に縫
い直しちゃって——」

「ちよっと待った！」

ジムはふと、彼女の声の样子がどこおかしいこと気づいた。激しいノイズ
に混じり、途切れ途切れに——

「二人とも、来ちゃ駄目……」

「え……？」

ボールも異変を察知する、どこから声が届いているのか？ キュベレイダム
ドと百式クラッシュを探し、再度辺りに目を凝らしたジムとボールは、ハッと
驚愕に目を丸くした。

激戦跡のモビルスーツの物だとはかり思っていた残骸の中に、肢体をもがれ
ズタボロになったダムドとクラッシュが漂っている。

「ノズちゃん!? マーキーちゃん!?」

「何があった!?」

慌てて近づこうとしたストームプリンガーとポリボッドボールの鼻面を、い
きなり、メガ粒子砲のエネルギービームがかすめた。間一髪で制動をかける。

「んだあ!」

ジムと、そしてボールは、ビームが放たれた方を見向いた。

シューンのジオング・スペクトラが、轟沈したムサイ級の残骸の影から、
ゆっくりと白亜の姿を現す。

二人は息を飲んだ、突然正体不明のガンブラが現れたことにも無論驚いた
が、にも増して、そのジオングの完成度の高さに、二人は目を奪われた。

「なんて緻密なスジボリだよ……」

「なんだ!」

ポリボッドボールが突然、機能を停止した。コクピットのコンソール計器が
次々に沈黙する。慌てて再起動しようとするが、うんともすんと反応がない。

「どうなってんだよ!」

そして、いまや単なる動かぬ動かしきれない化したしまったポリボッドボールの多脚
を、頭部にメインウェポンとして装着したG・H・L・M・A・D GUNを、ジオ
ング・スペクトラの手の指から発せられたメガ粒子砲が粉碎した。

そんな無残な光景を前に、シューンは微かに表情をゆがめた。出来る事なら
誰を傷つけることもなく、ゴールドン・ポリキャップを手に入れたかった。そ
れでも、ドンに恩返しをするためなら……彼は心を鬼にし、表情を再び氷の様
に冷たく鋭く尖らせると、メガ粒子砲の矛先を、ポリボッドボール同様、機能
停止したであろうジムのストームプリンガーに向けて——

「……なん、だとお!」

思わず驚愕の声をあげた。

見れば、ストームプリンガーは機能を停止するどころか、ライフとG・H・
L・M・A・D GUNを放ちながら、凄まじいマニューバでジオング・スペクト
ラに向かってくる。シューンは咄嗟の機動でストームプリンガーの攻撃をかわ
すと、威嚇のメガ粒子砲を連射しつつ、懸命に距離を作った。

「なぜ機能停止しない!?」

そしてようやく気づいた、ストームプリンガーの全身が、ほのかな輝きに包
まれている。その輝きはストームプリンガーのコクピットから、コクピットで
ジオング・スペクトラを睨みつけているジムから、彼のポケットから、そして
ポケット中の6つのゴールドン・ポリキャップから放たれていた。

「あの光……ひよっとして、GBN内に閉じ込めるべく放った我々のスー
パー・ウルトラ・サイバー介入からお前たちを救い、ログアウトさせた……あ
の力か!」

思わず声に洩らしたシューンの言葉に、ジムは息を飲んだ。

脳裏に、琉依XIIIに勝利した激闘の記憶が蘇る。

「じゃあお前は……お前らの正体は、この世界をフェイク・ガンブラで溢れさ
せようとしているっていう……闇金型マフィアか!」

ジムの胸中に憤りが湧き上がる。
「なんでそんな酷なことしようとするんだよ!」

憤怒をぶつけようとするかの様に、再度ジムはジオング・スペクトラに突進
した。そんな彼を近づけまいと、シューンは、ジオング・スペクトラの手の指

ジムは圧倒され、ボールは必死に脳内のエアトリセツをめぐって、
「しかも、あの外装の改修……他のガンブラとのミキシングじゃない、プラ板
とパテを使った自作だ……」

魅入るように目をみはる二人のコクピットに、シューンの落ち着いた声が届
く。

「ゴールドン・ポリキャップを渡してもらおう」

ジムとボールはハッと緊張に身をこわばらせた。

「ひよっとしてあんた……ポリキャップの情報盗んで来いってノズとマーキー
そそのかしたヤツ?」

「もし大人しく譲ってくれば、あのキュベレイや百式の様にはしない。それ
なりの報酬も支払おう」

「え! 報酬!?」ボールは冗談めかして応えると、「なあんで、残念だけど僕
ら、そういうの間に合ってるんで……だよジム?」

「お前が言うのもどうかと思うけど、まあ、事実ってヤツ? それに、ノズと
マーキー、あんな目にあわせた相手じゃな、どんなに好条件提示されたところ
で、首たてに振るわけには……いかなえてヤツ!」

言うが早いか、ストームプリンガーは、ジオング・スペクトラに突進した。
G・H・L・M・A・D GUNとビームライフルを両手に構えロックオン、ジムが
トリガーボタンを押そうとした——その直前のことだった、ジオング・スペク
トラの肩のドアが開き、新たなスラスターが姿を現した。

「なっ!」

「追加のスラスター!」

驚くジムとボールの目の前で、ジオング・スペクトラは凄まじいマニューバを
披露すると、ストームプリンガーから放たれた二本のビームを巧みにかわした。
「ならこつちも!」

ボールは表情に気合を入れた。ボールのポリボッドボールも、カスタムパー
ツとして装備した多脚をカウンターウェイトとし、その反作用を利用すること
で、宇宙空間で機動性が大きく増す。

「ストームプリンガーと挟み撃ちにすれば!」

その時コクピットに、ノイズまみれのマーキーの声が飛び込んできた。

「……油断は駄目、そいつは怪しい術を使う……!」

「え?」

次の瞬間、ジオング・スペクトラから闇色の波動が一带に放たれ広がったか
と思うと、ポリボッドボールとストームプリンガーを包み込んだ、すると——



ジオング・スペクトラ

シューンが製作した白亜のMS(モビルスーツ)。指の先端にメ
ガ粒子砲を備えるほか、有線式ケーブルで繋がれた腕部をまる
ごと射出・制御することも可能となっている。丁寧かつ緻密なス
ジボリにパテとプラ板を使った外装など、神々しさまで獲得して
いる。脚なんて飾りです。



機体紹介
2

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE



お前らの正体は、この世界を
フェイク・ガンブラで溢れさせようと
しているっていう……闇金型マフィアか!

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE



あの外装の改修……
他のガンブラとのミキシングじゃない、
プラ板とパテを使った自作だ……

からメガ粒子砲を続けざまに放ち、
「この世界を牛耳るため、世界の富のすべてを、我らの手中におさめるため！」

加えて頭部と腰部の砲口からも弾幕のように放たれるメガ粒子砲を、ジムは懸命にかわしながら、
「んなコトのためにガンブラを利用するなんて……寂しくないのかよ！」

「富を欲するわけではない？ 世界を牛耳りたいわけでもない？ なら貴様は、なんのためにガンブラで戦う！」

シューンは怒声のごとく告げると、ジオング・スペクトラの両腕を分離させた。
「なんのためでもない！ オレは……オレらはただ、ガンブラが大好きだ！
ガンブラバトルがたまらなく好きだ！ ただそれだけだ！」

ジムも叫びを返す。

「……綺麗ごと……」

シューンはギリリと奥歯を噛んだ。

そんなジオング・スペクトラのコクピットに、

「あんただってそうじゃないのか！」

ボールの声も飛びこんでくる。

「だってそのジオングからは……あんたのガンブラへの気持ちが思いっきり伝わってくる！」

シューンはまるで殴りつけるようにコントロールグリップを操った。

執拗に放たれる攻撃を、ジムは懸命にかわし続ける。

「ジム！」

激闘の様子を、息を飲み見守るしかないノズが叫んだ。見れば分離されたジオング・スペクトラと機体とを結んでいる有線コントロールケーブルが、ストームプリンガーの周りを取り囲んでいる。

「……誘い込まれた……!?」

思わず声にしたマーカーの、ノズの、ボールの目の前で、有線ケーブルがストームプリンガーを固く羽交い締めにした。ケーブルの先端の手の指の砲口が、身動きとれなくなったストームプリンガーに——ジムに狙いを定める。

「それでも、私は……大切な人に恩返ししたいんだ！」

すぐのように告げるシューンを見つめるかの如く、ジムは、自身に狙いを定めるメガ粒子砲の砲口を睨みつけた、そして、

「だったらニセモノ作りの手伝いなんかじゃなくて、本物のガンブラの……ガンブラバトルの素晴らしさを教えてやりやいいだろ！ それこそホントの恩返

中に生まれ現れたそれを握り、取り出して見れば、

「黄金に輝く……ポリキャップ……」

聞こえた声に、ジムが、ボールが、ノズが、マーカーが、驚きの視線を向けた。

「7人目の……レジェンド……」

全員のコクピットに接近警報が鳴り響いたのはその時だった。

ハッと見上げれば、向かって来る一機のガンブラ——

「違う！」ボールが気づいた「あれは……ガンブラ！」

突進してきたガンブラは、ライフルの狙いをジオング・スペクトラに定めている。そのコクピットで、

「どうやらアンダーボスの座にふさわしいのは、この俺のようだな！」

グレースーツのヤサ男がニヤリとトリガーボタンを押した。

シューンは驚き思わず身を凍らせた。

咄嗟にジムはスロットルを押し込む。ストームプリンガーは目をみはるマニューバでジオング・スペクトラの前に位置取ると、盾となってガンブラの攻撃を受け止めた。

「ジム！」ノズが叫び、ボールとマーカーが息を飲む。

シューンがガンブラにメガ粒子砲を放つ、命中、ガンブラは霧散した。

見れば、ストームプリンガーのコクピットが、ガンブラの攻撃に貫かれて

いる。

あつという間の出来事だった。

四人はただ、言葉が失った。

そんな皆を、眩い光が静かに包んだ。まぶしさに思わず目を閉じ——次にまなこを開けば全員が、コクピットの外に立っていた。視線をおるせば足もとの大地に、ジムが、眠るように横たわっている。

どこからか声が聞こえる。

「いまここに、7つのゴールデン・ポリキャップが集まった。ゆえに願いを告げよ、望みはなんだって叶う……天と地を入れ替えることも、星屑を金平糖にして頬張ることも……目の前に横たわるその者を、蘇らせることも……」

シューンが見守る中、ボールは、ノズは、マーカーは、視線をかわした。

「……なんだってかなうっていうなら……願いはもちろん……」三人は声を合わせて、

「温泉旅行！」

次の瞬間、あたりを包む光は輝きを増し、すべてをまぶしく消し飛ばし……

皆の心から、ジムの記憶は失われた。



しになるんじゃないか！」

シューンはハッとした。

次の瞬間、一陣の記憶のそよ風が、彼の心の中を吹き抜けた。

それは、いまは亡き両親から、はじめてガンブラを買ってもらった時の思い出。無我夢中で箱を開け、ビニールを破る……一心不乱にトリセツと向かい合

い、無心でニッパを握った、至福の時間……。そしてドンは、そんな幸せを

与えてくれた父や母と寸分変わらぬ愛を自分に注いでくれた。

——そうかもしれない。

今度は自分がドンに、あの豊かな時間を、返してあげる番なのかもしれない。

シューンは碎けるほどに強く握っていたグリップをそっと離れた。

ストームプリンガーを羽交い締めになっていた有線ケーブルが静かに解かれた。

暫しの静寂が過ぎる。

ふとシューンは、なにやらポケットが暖かく火照るのを感じた。手を入れ、

→大型ながら優れた加速力を持ち、分離・コントロールが可能な腕部を持つジオング・スペクトラ。ストームプリンガーですらその対処に四苦八苦。だが、バトルと“ガンブラ”に懸ける情熱が勝敗を分けることになる。



Gundam Build Divers
GAWC
World Challenge
次回予告!

次回はこれまでのバトルを振り返るエピローグ篇!!
温泉旅行が放つ圧倒的魅惑に
敗北を喫したジムの記憶に、
なにかオチは付くのか???

次回
NEXT
EPILOGUE